

初
白
髮

人
物

淀君

大野修理治長

同 主馬治房

茶道丹齋

小姓

侍女青柳

同 千草

同 若江

外に大勢

女の童

初白髮

大阪城内

淀君の居間

城中淀君の居間、床、違ひ棚、裨は狩野永徳あたりの筆にて、花鳥を金地に書いたもの、但し一杯に書くと、役者の衣裳との配合悪くなる恐れあれば、その心すること。上手に階段を見せる、この階段は横濱三溪園にある桃山御殿のそれを参照して、中程にて折曲りたるものを造ること、手欄つき、白木。

下手に廊下、廊下の縁先きに、手欄の低きものを付ける（桃山御殿の式）

手欄の先きが庭の心にて、小さな木の梢がほどよく見えてゐる、遠景はやはり庭つづき、城中は高地ゆゑ、幾内の低き山々は見えない。

居間は一段と高く、御簾を釣つてあること、下の座敷には、その時代の調度など置くこと宜しくあるべし。幕明くと、腰元の千草と青柳とが話合つてゐる。

千草

なあ青柳殿、この御城内には大勢の、腰元衆もある中で、お前様と私とは、取分きての中によさ、よろづ何事も隠し立てはしますまいと、互に誓をかけたのに、お前さまも便りない、なぜ物事を隠されまする。

青柳

こりやおかしい千草殿、そのお恨みなら私から、云はう／＼と思ふてゐた、豊國様の御寶前で、云ひかはした姉妹、お前は一つ年下の、妹になつたでござりませぬかえ、誓文私は何一つ、隠したことはありませぬが、それに引替へ此頃は、どうやらそでないお前の素振、私に隠してゐる事は、反つてそちらにござりまする。

千草

まあ逆振ぢなお前の掛合、何を私が隠しました。

青柳

私が知らぬと思ふてか、證據と云ふのはお前の懐ろ。

千草

え。

青柳

祕し隠しに隠してある、品をば見せて下さりませ。

千草

まあお前が！ あれをどうして。

青柳

それを知らないでなりませうか、いつも人目の無いときには、懐かしさうにつくづく、見守つてゐるではござりませぬかえ。

千草

知られた上では詮が無い、親兄弟にも話されぬ、耻かしい事ながら、お前にだけは見せまする。
(と懐中から香包みを出して、青柳に渡す。)

青柳

この香包みは。

千草

そのやうに聞くことかいの、先きの先きまで云交はした、殿御からの送りもの。

青柳 まあお前様は大膽な、掟の厳しいお城にて、どうしてまあ大それた。

千草 戀をする身になつて見や。(青柳の手から香包を取返し)命一つを投出したら、どんなに掟が厳しか
らうと、恐ろしい事はない。

青柳 してその香の主と云ふのは。

千草 お城をきつて一二の美男。

青柳 え。

千草 お前もまあ察しの悪い、(香包を開けて中の香木を出し)この御紋をそつと見や。

青柳 や、こりや御紋所の桐のおしるし。

千草 御祕藏の名香ながら、おん兄君の修理さまが、お上からの御拜領、それを主馬様がお持ちあつて、
二人一緒になるまでは、我れとも見よとて預けられた、私に取つては人質代り、大事のものであり
ます。

青柳 では主馬様であつたのか。

千草 この香のことは、必ず／＼人に云つてはならぬぞえ、もし御上のお目に入らば、主馬様ばかりか
兄君の、修理様までが御迷惑、神かけて口外して下さるな。(と香包みを袖に入れ)さあ、私のことは
打明けた、此上はお前の番、包まずお話しなされませ。

青柳 いえく、何の私に、話すことがありませう。

千草 今になつて隠すとは、恨めしいお前の仕方、隠されるなら私から、お前の胸の眞只中、圖星のこ
とを申しませうぞ。

青柳 なに、あの私の胸の中を。

千草 戀をする身は人事も、思ひ遣りは深いもの、もし間違ふても怒りやんな、お前様の戀男は、長門
様であらうがな、ほゝゝ、顔の色の赤うなつたは、やつぱりそれに相違かない、お城の中のよい殿
御、梅と櫻の長門さま、主馬様、いづれをいづれとも云はれませぬ。

青柳 ほんに、主馬様も好い男ぢやのう。

千草 主馬様もよい男、好い男は好いが、様ものもの字が、ちと氣に染まぬわいの。

青柳 こりや濟まぬことを申しました。(と詫る。)

千草 (笑つて打消し) したが青柳どの、お前の心を長門様は、もう御存知なされてか。

青柳 いえく、何の耻づかしい、そのやうな事を長門様が…。

千草 ではたゞ思ふてゐるばかりか、それでは成らう筈がない、お前も速水甲斐さまの娘御、程も身分
も似合の夫婦、しかしお前が思ふてゐることを、御承知無くば奥様を、よそからお迎へなされませ
う。

青柳

長門さまへ奥様が、できたら私は生きてはるぬ。

千草

それほどお前が思やるなら、つい一筆にさらくと、思ひのたけを書いたが好い、一層取次いであけうわいな。

青柳

あの姉さまが、長門様へ。

千草

おゝ。

(と頷く。上手の襖を明けて茶道丹齋出る。)

丹齋

千草殿に青柳殿、こゝにおられたのか、おん上にはお庭の牡丹を、御覽なされてぢや。

千草

それはよい事を伺ひました、こゝにゐては、またお叱りを受けうも知れぬ。

青柳

ほんにさうぢや。

(と二人は立上がる。)

丹齋

お氣に入りのお前様方が、お傍にお出でなされたなら、少しはこの丹齋が、御用が減ると申すもの、それ丹齋、やれ丹齋と、とんと丹齋は獨樂のやうに、くるくと廻つてゐなければなりません。

千草

御用を足すのをそのやうに、不足顔をなされますと、その由をお上さまへ。

丹齋

どつこい〜、云ひたくは云ふて見よぢや。

(と譯けて、丹齋は千草の顔を覗き込むやうに見る。)

千草 え、知らぬわいな。

(と縁の上手に入る。)

丹齋 え、知らぬわいな。

(と青柳に誹りかゝる。)

青柳 え、知らぬわいな。

(とやはり千草の入つたあとへ入る。丹齋呆れて)

丹齋 こりやどうぢや、なんでも此の頃は、うすけたいの悪い千草殿、どうしても一件もの、うまく此

鼻で嗅出して、一儲けと鶉の目鷹の目、まだ分からぬとは情ない。

(と、此時、七つの時計の音。)

丹齋 や、もう七つか。

(と云ふ所へ、下手より大野主馬治房、伽羅の油、香木を臺に戴せたのを持つて出で来る。)

丹齋 や、これはく主馬様、御奥への御使ひにござりまするか、それとも彼の人に、ちよつと御對面

といふ筋にござりまするか。

(と座して挨拶する、主馬も座して)

主馬 戯れを申すな、右大臣家よりお袋様へのおん使ぢや、尤も追つて御對面なされうほどに、この品

品茶道の者に渡し、御披露だけを急げとの御意なのぢや。

丹齋 只今御上さまにはお庭にて、牡丹の御遊覧、左様ならばこの丹齋が。

主馬 南蠻渡來の伽羅香油、香木の品々、委細は目録に認めある、表立つた献上にもあらざれば、御機

嫌を以て申上げよとの、右大臣家別しての御誕にごさるごぞ。

丹齋 畏まつてござりまする。

主馬 然らば丹齋。

丹齋 委細心得まして、ござりまする。

(と主馬立上る。)

丹齋 あ、もし、彼人へ知らせませうか。

主馬 今方御前にて、大事の談合最中ぢや。

(と主馬は元の口へ入る。丹齋後を見送つて)

丹齋 やれ／＼、御禮を貰ひそこねた、しかし珍らしもの好きのおん上さまへ、南蠻の香の品々、つい

初にお目にかけてたら、定めて御褒美はずつしりあらう、それを思へば主馬様は、愚老のためにはやは

はり福の神。
(と臺を持つて、縁の上手に入らうとすると、腰元の若江が出て来る。)

若江 丹齋どの。

丹齋 お、若江さま、しておん上には、お庭にお出でなされますか。

若江 いえ、もう、こゝへ。

丹齋 なに、もうこゝへ、こりや御褒美を棒に振つた。

若江 なに。

丹齋 いえ、こちらの事でござりまする。

（縁の上手にて、警蹕の聲がする。若江と丹齋はよき所で待受ける。）

（縁の上手から淀君は、以前の千草、青柳始め侍女を連れ、千草は牡丹の枝を手にして居る。）

丹齋 はつ申上げまする、只今御表より御使として、大野主馬おん出で、南蠻より途來の香油香木、右

大臣家よりお袋様へ、御進上とござりまする。

淀君 してその使の者は。

丹齋 お庭にて牡丹花御遊覽の由、申しましたる處、追て御對面の御都合なれば、御機嫌を以て御披露申せと、別して御申含めの由にて、お表へ歸られました。

淀君 さうであつたか、今に始めぬ秀頼殿の心遣、天晴れ天下を治める器量ぢや、かゝる發明のものに、いまだに天下を返しくさらぬ、關東の偽りもの、ほどを知らぬ古狸、この右大臣家の心掛けで、日

本の政治をしたなら、六十餘州はおろか、朝鮮大明南蠻までも、心のまゝにならうもの。

(と云ひながら、臺上を見ると、さすがに女性のことゝて、香に目がくられてくる。)

淀君

ほ、

(と薄笑ひしながら、侍女が縁先に直せし梅に座し)

淀君

その油取つて見せや。

(と云ひながら、千草の持てる花に心づき)

淀君

その花を。

(と差圖すると、千草は心得て、花を持つて二重臺を上り、盆を取つてそれへ花を置き、花器を持出して、投挿しに生ける支度をする。青柳は臺上から香油の品々を取出して、淀君の前に置く。淀君は伽羅油を手にし

淀君

和國に稀れな伽羅の油、日向に長うるたせいか、どうやら髪がばさらになつた、青柳そちや髪上

青柳

畏まりました。

淀君

丹齋。

丹齋

はつ。

淀君 右大臣家の仰せにもせよ、妾が興を破らじと、臺の物を預け行きしは、遠がは修理の弟ぢや、丹齋大儀ぢや、さがりや。

丹齋 はつ。

(と當が外れたと云ふ思入あつて、丹齋は元の口へ入る。青柳は拵へを終る。)

(侍女達は鏡臺を直して、次へ退出する、千草は花を投入れてゐる。)

淀君 うつらくと夢のやうに、花の春は過ぎて行く、櫻が散れば山吹が咲き、若葉の間に藤の花波、今は牡丹が盛りの時、一年中のよい季節、花にも酔ひ、戀にも酔へる女時、心の行く頃ぞいの。

千草 左様にござりまする。

淀君 青柳まだか。

青柳 できましてござりまする。

(と青柳は淀君の後に廻る、鏡を鏡臺の代りに、二人の女の童が前に坐して捧げてゐる。)

淀君 千草、修理はまだ參らぬかいの。

千草 まだ、お參りがござりませぬ。

淀君 追付け暮るゝであらうに。(と庭の方を見て、日差をちよつと考へ)いつも、もう來る時分ぢやが。

千草 いつもより、お遅いやうにござりまする。

(青柳霞面の代りに、懐紙を口に啣へ、梳髮にかゝる、その面の鏡に映るのを見て、淀君は千草の方を見廻し
て)

淀君 千草はいくつであつたのう。

千草 はい、十八でござりまする。

淀君 一つ違ひと覺えたれば、では青柳は十九ぢやな、妾もそちたちの年頃は、叔父上野殿の手許で育つたが、血生臭い折の事とて、戀の、情けのと云ふやうな、生めかしい味を、つい知らずに過ごしたが、久しく軍も打絶えて、今は泰平の天下の春、そち達にはそのやうな、浮いた話があらうのう。

千草 申しおん上さま、淀の厳しいお城の中、私たちに濫らな事が……。

淀君 何の無い事があらう、そちと云ひ青柳と云ひ、いづれも戀を知る時分、若い女子の浮世ばなし、戀の沙汰の外にあるものぞ、さあ白状しや、したが妾も仇には聞かぬ、戀を持つ身は互のこと、似合はしいと思たなら、随分肝入りして、思ふ人に添はしてやらうぞ。

(千草、前の淀君の白のうち、挿花を終り、よき處に置き、あとは畏まつて聞いてゐたりしが)

千草 そりや全くでござりまするか。

淀君 何の嘘を云はうぞ。

千草 さあ青柳、早うお願ひなされませ、話はさつき聞いたばかり、これがこのやうに運のよい、羽目になるのは仕合もの。

青柳 でも、そのやうな事を私から。

千草 え、まあ、遠慮も時によりまする、さあ／＼早うお願ひしや、さあ早うお願ひなされませ。

淀君 千草、まあ静かにしやいの、さあ青柳、早う打明けて聞かしやいの、これ云はぬのか、云はねばよい、そちの口から聞かぬうちに、もしや外から聞いたなら、逆さまに恨むぞや、金輪奈落この淀が、邪魔して中を裂かうぞ。

千草 おん上様の御機嫌を損じては一大事ぢや、早う打明けて申しやいの。

青柳 ぢやと申して私の口から。

千草 その後退りの生ぬるで、どうして人に戀をした、早う申上げたがよいではないか、申しおん上様、青柳の思ふてゐられる相手と云ふのは。

青柳 あ、これ。

千草 え、今更隠すことではない、あの長門様でござりまする。

淀君 ふう、あの長門を青柳が、なるほどこりや似合の若者、あの重成は常陸介の嫡男、殊には右大臣家に、お乳を上げた宮内の子、云はば秀頼殿と乳兄弟、また青柳は甲斐守守久の娘なれば、隔ての

あらぬ身分の相應、して青柳の心中を、長門は知つてゐるのか。

千草 それが腹はらの何とやら、先きはまだ知らずでござりまする。

淀君 ほゝゝゝ、はて埒あてもない、とんと人形の戀ぢや、よい／＼、妾がその人形に魂を打込んでやりま

せう、明日にも双方の、親共を呼出して、この戀急度かなへて遣りませうぞ。

千草 これ青柳、早うお禮を申しや、おん上さまが仲に立つ、天下晴れて思が應ふとは、日本一の仕合せものぢや。

青柳 忝かたじけなくなうござりまする。

(とこの件のうち、青柳が白を云ふには、髪梳きの間に、懷紙を口より取る工夫あるべし、受答の中程より、手を休めて淀君の白を謹みて聞くやうにする、而してこの白になりては、手を付いて禮をする科あるべし。)

淀君 身の戀が應たら、早う髪を上げやいの、それ／＼、千草その伽羅を。

(と差圖する、青柳は淀君の髪を梳けづる、千草は心得て髪かみの末に香を留める。青柳は淀君の髪を梳りかけながら)

青柳 申しおん上様、あの千草にも……。

淀君 (と云ひかけるのを千草が目で留める、淀君はよい心持になつて、のんびりした調子で) 千草がどうした……。

(と門返す。青柳が梳づる髪が、女の童の捧げてゐる盆上に落つ、淀君見て)

淀君 大層な抜毛ぢやな。

青柳 時節のせいで只今は、故い毛が抜けまするやうにござりまする。

淀君 さうであらう。(と盆を見るときもなく見て) これよう見せや、おゝその白いは、えゝ忌はしいこの白

いは、こりや誰れの毛ぢや。

青柳 目立つほどにはござりませぬが、お髪の中に、ほんの二筋三筋ほど。

淀君 なんぢや妾に、鏡見せや。

(と女の童の持てる鏡を取つて、忙がしく見て)

淀君 おゝある、淺ましい、いつから妾に生初めた、女子の命を刻む白髪が、いつのいつから生へたのぢや。

千草 あれ、ほんの近頃の事にござりまする。

淀君 そりや知れた事ぢや、先から白い毛がなんであらう、穢らはしい、死人のやうな灰色の、この毛がどうして頭に生へた、追付胡麻鹽のやうに、この黒髪が班らにならう、額と云はず、頬と云はず、あの皺が寄せて來るのぢや。

青柳 いえゝ、なんでそのやうな、一筋二筋ござりまするのは、福白髪とか申しまして、めでたいさ

うにござりまする。

淀君

何がめでたい、何がめでたいのぢやいのう、若い人達に嫌はるゝも元はこれぢや、蔑すまれるのも元はこれぢや、なまじこのやうなものがあるからに、眞實が見えて恨めしい。

(と鏡を捨てる。)

淀君

千草來や。

(と千草を捕らへ)

淀君

腕を見せや。

(と二の腕を捲くり、自分のと較べて見て)

淀君

おう、やはり其方は若いのぢや、暖かい血汐が、浪を打つて通ふてるる、ほんのりと赤味を持つて、その色が羨ましい。

(と千草の腕を握る、千草は痛さに拂退けやうとするとたんに、以前の香包みを袂から落とす。淀君があつと

云つて取らうとするのを、千草は手早くそれを隠してしまふ。)

淀君

千草、それを見せやいの。

千草

おん上さま、御免なされて下さりませ。

淀君

なんで、それを隠しやるのか。

(と逃げる千草を追掛ける、青柳が支へるのを突造る、女の童達は上手に逃込む、千草は縁の下手に逃げる、殆ど入道ひに、大野修理治長が出て来て、あとを追ふ淀君を止める。)

修理
おん方さま。

淀君
え、修理留めな。

(と振拂ひ行くやうにする、修理は抱くやうに止めて)

修理
ま、お静まりなされませ、例の御病氣が起つたと見えまする、早う白湯なりと。

青柳
あい。

淀君
白湯も薬も入らぬ、さうぢや、修理に聞くことがある、そちは下りや。

(と青柳を遠ざける。青柳が上手に入ると、淀君は立つた儘にて)

淀君
修理、何として早う來やらぬ。

修理
御前にて大事の評定、それ故に思はず遅刻……。

淀君
云やんな修理、そなたは妾に飽きたのであらう、それで遅うなつたのか。

修理
勿體なき仰せ、何として治長がさる……お恨みは尤もながら、評定は天下の大事、憚りながら戀路には代へられませぬ。

淀君
それなら問はう、妾に白髪を生へてあるのを、そちは知つてゐるやらうな。

修理 それはまた何とした……左様な事は、修理お返事に困りまする。

淀君 ぬけくしい、さうちや、妾も寄る年ぢや、淺ましい白髪は生へて來た、そちが嫌らやるのも尤もぢや。

修理 何とて其様な事を仰せられます、おん情を蒙むつたのを、有難しと心底から思ふ治長、只今のやうな仰せは、何共合點が参りませぬ。

淀君 白々しい治長、年取つて嫌なら嫌と、男らしい云ふたがよい、太閤に見えてからは、日本國の母とも思はれた妾、それに對して不實の所業は、専上にも程があらう。

修理 益す出で、心に落ちぬおん仰せ、もしお言葉のやうなれば、勿體なくも治長が、お前さまをよそにしたやうにも聞こえまする。

淀君 さうちやとも、盛りを過ぎた姥櫻、もう妾には用は無いのぢや。

修理 日本國に隠れもない、美女と云はれしお前さま、役にも立たぬ卑下のお詞、もし牡丹は散るまで美しうござりまする。

淀君 口前で妾を欺さうとしても、其手には乗らぬぞや。

修理 欺されるのは某でござりまする。磁石の針が、いつも北を差すやうに、某の心はいつもお前様を忘れませぬ、白髪がなんとござらう、皺がなんとござりませう、美女には年はござりませぬ。

淀君 何とでも云や、いくらそなたが云ふたとて、年老ひぬれば秋の扇、關寺の小町を見や。

修理 それは七十に餘つた姥のたとへ、お戯れに聞こえまする、昔常盤の前は三人の子持、これにさへ清盛は思ひをかけたではござりませぬか、また新田左中將義貞に、賜はつたる勾當の内侍も、その年は餘程の年配、昔より器量勝れた女子には、衰へと云ふことの無い、動かぬ證據にござりまする。

(淀君少し氣が直つて來たが、まだ表でだけは怒つた風を見せてゐる。)

淀君 え、その常盤なら九條殿の雜色、また勾當の内侍とて、身の素性は定かでない、その様な女子に較べるとは、緩怠至極ではないか。

修理 いかにも素性正しいお前さまと、一口に較べましたは不調法、しかし、その手合のものでさへ、美しければまつその通り、ましてお前さまおん素性は、總見院殿織田右大臣信長公の御姪にて……

(と云ひかけると先手を取られたやうな氣分になつて)

淀君 え、つべこべと、もうよい。

(と笑ひかけたが、思ひかへして)

修理 改めて問ふことがある、いつぞやそちに遣つた香、あれを所持してゐるやらうな。

修理 いかにも祕藏しまかりありまする。

淀君 我が身とも思へと、戯れ云ふて遣つたもの、必ず持つてゐるやらうが、どうして千草が持つてゐる

る、こりや誰れかあの女子に、與へたものがあるであらう。

修理 由縁も無きあの千草に、大切な下されもの、與えう筈はござりませぬ。

淀君 ではどうしてあの女子が、香を所持してゐやるのぢや。

修理 さ、それが不審でござりまする、お許しもござりますれば、某が取調べ、實否を質すでござりませう。

淀君 ほゝゝ、そなたが千草を調べると、ふう、なるほど二人して口を合はせるには、それが一ちよい分別。

修理 こはおん上にはまだそのやうな。

淀君 罪人を調べるのに、その相作りが吟味の役目、望みとあらばそれもよからう。

修理 すりやお許し下されますか。

淀君 妾もこゝで聞いてゐよう。

(と鈴を振る、以前の若江先きに女の童二人も出で、畏つて命を待つ。)

淀君 千草は何れに居る。

若江 一間に控えさせてござりまする。

淀君 これへ連れて來や。

若江 はあ。

(と、若江立つて襖の中に入る、女の童出で、座を直す、淀君は上段に、治長よき處に座すと、千草萎れて出る、あとから若江がついて出る。)

若江 罷り出ましてござりまする。

淀君 お、よい、下りや。

若江 はあ。

(と元の口に入る。)

淀君 さあ、調べやいの。

修理 はつ。

(と千草に對し)

修理 千草、最前おん上様の、お目に留まつた香包み、それを出してお見せやれ。

千草 さらば御覽に入れまする。

(と修理の前に持參して、元の座に直す。)

修理 なるほど、こりやこの修理へ下されの品、これをどうして千草おん身が。

千草 はい、その香包みはさるおん方から、預かりまして持つております。

初 白 髪

淀君 そのおん方とは誰れぢや。

千草 そのおん方とは。

修理 誰れぢや、名を包まず云ふたがよい。

千草 いえく申上げましたら、どんな祟りがあらうも知れず、たとへ死んでもそのお名は。

修理 はて、云ふた所で大事は無い、この治長が引受けう。

千草 いえく、なんでも申されませぬ。

修理 はて何なりと申して見や。

(二人の問答を、やはり痴話の一種らしく、聞取つてゐる淀君は、疍の調子の張り高く)

淀君 修理、問ふに及ばぬ、もう妾にはよう分つた。

修理 分つたと御意あるは。

淀君 妾に會得がいつたほどに、拵へ詮議止めにしや。

修理 拵へ詮議とおつしやるのは、もし某が……。

淀君 はて、よう分つた。

修理 調べ口もおん聞きなきに、早合點とはちと御無體。

淀君 何が無體、何であらうとその香包を妾が持つてゐたことは、承知の筈のその女、それをのめく

所持してゐるのは、主に對して無禮の女子ぢや、またその無禮を承知でさせる、人もあらうと云ふものぢや。

修理 はて執念きおん疑ひ、何處までも修理の言葉を、お用ひなくば今日前、千草を責めて實舌を質し、身に覺えなき明しを見せ申さう、こりや千草、なぜ云はぬ、さあ包ます申せ、隠し立てしたら爲めにならぬと思へ。

千草 たとへ此身は、如何なりませうとも。

修理 申されぬか。

千草 はい。

修理 是非に及ばぬ。

淀君 (修理は決心して、千草を一刀に切る。淀君はそれを冷やかに見て)
修理、よう切つたのう、木につく蟲を殺すのも、蟲食ふた木を大事にする、あまり深く詮議した

ら、終にはそなたも罪にならう、有りやうは其事が、心掛りであつたわのう。

(と云ふ所へ、青柳が侍女二人と共に出て来て、この體を見て驚き)

青柳 あれ、千草殿がなんでまあ。

修理 さる人と不義の疑ひ、それ故の成敗。

青柳 え、ではあの主馬さまも……。

修理 なに、主馬が何とした。

(青柳悪いことを云つたと云ふ思入、黙つてしまふ。)

淀君 これ青柳、今がた主馬と申したのう。

青柳 主馬様と申しましたは、つい埒もない私の粗忽。

淀君 これで様子が分かつた。最前云ひ淀んだ、千草の戀の相手と云ふのは、

(と千草の死骸を見て)

淀君 鈍な奴、その時主馬と一口云ふたら、夫婦にしてやらうものを。修理、千草の死骸をよきに……。

修理 はつ。(青柳に)こりや、一先づ死骸を彼れが部屋へ。

青柳 はあ。

(と侍女と共に、千草の死骸を選びて、三人入る。)

淀君 思へば不憫な女子であつた、人の戀の牲となつた、千草は笑止なものぢやなあ。

修理 いかにも氣の毒に存じます。

淀君 だが、のう修理、妾ほどのもの、戀路に、語り草にもならうと思へば、死ぬのも反つて身の仕合せ。

淀君

行く春のあとを追ふ、花のあはれさは、修理、近う。

(以前挿した牡丹の花弁、一二枚落つるのを、じつと見て)
(修理そば近うよる、淀君、牡丹をとつて花をしごいて捨てながら、なまめかしく修理と氣味合、御簾を静かに下す。)

(琴の音が調子高く聞えるうちに、幕を下す。)

—幕—

大正十四年二月一日印刷
 大正十五年八月一日再版
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
 第三卷



著者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

(非賣品)

松居松翁
 高安月
 山崎紫
 伊原青々
 岡鬼太郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

東京市下谷區二長町一番地

守岡功

東京市下谷區二長町一番地

凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番
 振替東京五二二九八番